

## 森田良行著『意味分析の方法—理論と実践—』

川口義一

本書は、著者が『基礎日本語』全三巻（各巻それぞれ、昭和五十二年・同五十五年・同五十九年初版出版）において採用した意味分析の方法論を、個々の語句の語義分析の具体的な手順を紹介する形で、改めて世に問うた本である。

著者の意味分析の方法論とは、語句の使用される一回ごとの「談話や文脈の流れの中での個別の意味」(p.11)に目を向ける立場であり、従来の意義素論的意味論で無視されがちな「実際の文脈中での文意に与える役割、表現の意図や効果との関わり」(p.12)を重視する立場である。本書第一章で著者自身が比喩で述べている(p.12)とおり、語句の各用法に共通する意義素の設定を中心課題とする意味特徴記述型意味論を「気圧配置を記入した天気図」を描く方法とすれば、著者の意味把握は「定点観測」であり、「全体としての天気ありよう」のみならず、「特定地点での気象の動きや変化」をつかむことのできる方法だと言える。

このように表現・理論過程における意味の分析・記述を行おうとすれば、その方法は極めて多面的かつ重層的なものにならざるを得ないはずである。これは、まさに言うは易く行うは難しの業であるが、本書の読者は「目次」を一瞥しただけで、著者がどれほど多くの意味分析の切り口を用意しているかを見てしばし嘖然

とするであろう。すでに「語義変遷と個別の意味」と題する第一章で語源解釈に基づく意義理解を示して、アプローチの一端を示した後は、以下に挙げる各章の題目を見ても分かるように、およそ談話・文脈における語句の動態的な意味分析に欠かせないであろうと思われる、多様な切り口が紹介されている。(本書評読者の便宜のために、当該章で扱われている語彙や現象を一部略述する)

第二章「表現と意味」(比喩・婉曲等)

第三章「文体と意味」(改まり語・俗語)

第四章「発想と意味」

第五章「基準と意味」(程度・位置等)

第六章「視点と意味」

第七章「語感・評価と意味」

第八章「対義語・類義語の問題点」

第九章「語義の性格」(対称性・意志性)

第十章「語義の性格と文法」

第十一章「文脈と意味」(修飾・結合等)

第十二章「文型と意味」(格形式)

章の題目から窺えるように、著者のような意味分析の方法を取る立場では、意味分析はそのまま文法分析や表現分析へとつながっていく。事実、第九章以降で取り挙げられている諸問題は、そのまま文法の問題でもあると言つてよいであろう。

今、一例として第十二章「文型と意味」三二九頁にある、動詞「のぼる」の意味記述を紹介しよう。ここで著者は、「のぼる」が前接句の二格、マデ格、ヲ格に立つ名詞の意味内容とのかかわり

で多様な意味の様相を呈すると述べ、次のように特定の文型に入れたうえで「のぼる」の意味を記述している。

「Aがのぼる」…「水銀柱がぐんぐん上る」起点・到達点なし  
「AがBにのぼる」…「月が東の空に昇る」Bは昇る起点  
「BにAがのぼる」…「頭に血が上る」「富士山に登る」Bは到達点

「AがBにのぼる」…「話題に上る」「万人に上る」Bは結果  
「AがBをのぼる」…「石段を上る」Bは移動の経路。継続行為の移動

このように著者の分析は、あくまで語句の一つ一つを例としての具体的な分析である。この第十二章に見出しとして取り上げられた語句だけでも九十一項目に及び、かつその中には「…にくする」「(富士山を写真に撮る)等」(343)・「ために…てみる」…かどうかためす」(343)のような句レベルの単位までが収められている。

本書のこのような構成を見ると、本稿が書評として成り立つためには、挙げられている語句の一々に関して、その分析の妥当性を検証して見る必要があるであろう。例えば、右記の「のぼる」の例などで見れば、「AがBにのぼる」文型が、あるときは「B⇨昇る起点」に、あるときは「B⇨到達点」にと、解釈できることに異論はないとしても、ではこの二つの意味類型はいかにしてこのように解釈仕分けられるのか、評者はそここのところの分析が聴きたいところなのである。そういう方向へ向かう分析のためには、「AがBにのぼる」文型のA・Bの名詞句の意味と動詞「のぼる」の意味のある側面がどのように作用しあって特定の意

味概念を紡ぎ出し、その概念への解釈を、助詞ガ・二がどのような機能で保証していくのかを論ずることが必要になる。そして、さらに、このような意味解釈機構は、われわれの世界認識とどのように矛盾せずに成り立ち、しこうして人間の表現と理解を可能にするかということも証明されなければなるまい。これは、著者のように、意味・文法・表現に強い相関を見いだしていこうとする立場の研究者にとっては、最終の課題の一つとなるはずである。

しかし、取り上げられたすべての語句についてこのような批評作業を行うことは、評者の能力の及ぶところではない。そこで、本稿は評論の仕方として、もう一つ別の方法をとりたいと思う。それは、任意の語句を取り上げて、その意味分析が本書でどのように行われており、その結果が読者がどう利用できるかという観点である。

例として「わけ」と「はず」を見てみよう。評者の専門の一つである日本語教育の分野においては、この二つの語は使い方に混同を起こす語句として、中級段階の文法・表現教育において注意すべきものの一つである。この二つの語の使い分けについて本書からどのような示唆が受けられるかについて見てみようと思う。

まず、「わけ」の用法を整理してみよう。「はず」と混同される「わけ」は形式名詞としての用法のみであるから、その部分の用法だけを羅列してみれば次のようになる。なお、「はず」と交換可能な用法には《可能》と記し、その例文は◆でマークする。

#### ①現状成立の経緯

◇これでおわったというわけだ／◇それで彼が好きになった

(という) わけね

②現状の認識

◇仕事をもっている人も多いわけだから、毎週集まるのもむずかしい

③特定の意図・目的

◇久しぶりで一杯やろうというわけが集まった

④道義的に承認できない事態

◇恩人を裏切るわけにはいかない／◇親の反対を無視して結婚するわけにいかないので、悩んでいる

⑤論理構成の否定

◇日本人ならだれでも日本語が教えられる(という)わけではない

⑥当然の帰結《可能》

◇そりや、怒るわけだ／◇予報では晴れるわけだが／◇車ならもう来てるわけなのに、おそいなあ

⑦道理上当然の成り行き《可能》

◇あいつにできるわけがない／◇こうなったら、ただで済むわけがない

以上のように用法⑥⑦が「はず」と交換可能な「わけ」の用法であり、これが学習者に「わけははず」という錯覚を起こさせ、誤用を生じるものとなる。

この「わけ」と「はず」の類似に関しては、すでに著者の前著『基礎日本語2』に言及がある(p. 411-412, p. 524-525)が、その趣旨は、「わけ」によって「自然の成り行き」事の経緯」を述べた状況で、その事柄が「主体の既知の事柄」でなく「未知の成り

行き」となれば「はず」の表現へと転ずるというものである。

一方、本書は分析の方法論を説いたもので、辞書的な構成の『基礎日本語2』とは異なるため、「わけ」と「はず」の意味用法を記述した箇所があるわけではないが、この二語の類似性について言及した部分が第一章 (p. 20-21) にある。そこでは、「深いわけがある」に見る、「理由・根拠・事情」を示す名詞「わけ」が右記の挙げたような用法へと抽象化していく過程が描かれているが、そこに「電車ストなら、いくら待っても来ないわけだ」(用法⑥) が「はずだ」に近い助動詞的用法」として紹介されている。

「わけ」と「はず」については、その他にも、第四章に「くわけはない」と「くないわけだ」の「発想の順序」の相違について (p. 211-212)、第五章に「くべき」と「くはず」に相違について (p. 228-229)、そして第十一章に「はず」と「わけ」がともに「決して…ない」だ」と「決して…はしない」の両文型で可能であるとの指摘 (p. 227-228) があるが、どれも直接「わけ」と「はず」の意義の類似と相違の考察に参考になるものではない。

本書と『基礎日本語2』の解説を総合すれば、読者は「わけ」と「はず」について、どちらも「当然の帰結」を述べるのに使う助動詞的な形式名詞で、その事柄が「主体の既知の事柄」であれば「わけ」を、「未知の成り行き」すなわち未来や仮想上のことであれば「はず」を使って表現できるということが読み取れる。これによって、一見「当然の帰結」を表すとも見える用法②が、しかし「はず」では置き換えられない(「仕事をもっている人が多い」ことは未知の事柄として扱われてはいない) ということの

説明は十分にできるであろう。

一方、用法⑤「日本人ならだれでも日本語が教えられるわけではない」についてはどうか。この種の用法は、『基礎日本語2』では『条件→結果』の関係を、一つの道理と見れば、『必然の帰結』の『わけ』となる(合意)と説明されている。この用法は「わけではない」という形式によって表現される。つまり「当然の帰結の否定」である。これは、ある論理構成(ここでは「日本人↓日本語教授可能」を是として認識する、その認識姿勢そのものを否定する表現である。すなわち、表現者の意図は「そういう考え方をしてはいけない」ということである。

この表現構造を、本書の著者の説明原理で解説しようとすると、「日本人ならだれでも日本語が教えられる」という事柄は「主体の既知の事柄」としてとらえていないということである。つまり、一般的には当然のような(日本人↓日本語教授可能)という論理関係を、表現者は「すでに了承されているもの」としてとらえていないということになる。このような認識の仕方を「既知」の対語である「未知」で表すのでは、若干不適切である。つまり、「知っているか知らないか」という事実に関する要素だけではなく、「知っているが、認めるかどうか」という表現主体の認識にかかわる側面が、そしてそれを相手の論理をただすことに使用しようという表現者の表現意図にかかわる側面が、等しく意味解釈に機能しているのである。本書がこの側面への配慮を欠くのは残念なことである。もし、主体の認識や表現意図に関わる意味の現れ方についての一章が立てられていれば、「わけ」と「こと」

(用法①②③で交換可能)や「もの」(用法⑤で交換可能)などの比較対照について、読者は大きな示唆を得られたはずだからである。

以上、本書の読者が研究・教育の面で本書から示唆を受けようとするれば、得るところは極めて大きいものと言えることが分かった。それは、単にそこに記述された分析結果がそのままで示唆に富むというだけでなく、前述の「主体認識」や「表現意図」に関わる問題のように、この細かい記述の網になおかつ掘り補らえられていないものを探るといふ点でも大いに示唆的なのである。

最後に、具体的な語についての意味分析をテーマとした最近の文献として、『日本語表現の文法』(上下)(宮島達雄/仁田義雄編著・一九九五・くろしお出版)・『あいまい語辞典』(芳賀綏/佐々木瑞枝/門倉正美著・一九九六・東京堂出版)・『右脳を刺激する日本語小辞典』(城生恒太郎/佐久間まゆみ・一九九六・東京書籍)を挙げておく。本書とこれらの文献との比較は紙幅の関係で割愛するが、意味記述の問題に関心のある読者は比べてお読みになることをお勧めする。すると、この三冊が取り上げている語句・表現の分析の多くが、すでに本書の著者によって、『基礎日本語』のシリーズで検討されているものが分かる。改めて、意味論の分野における『基礎日本語』シリーズの先駆的な役割を認識するとともに、その基礎となった方法論が本書において公開されていることを評価したいと思う。